

大学の図書館

第43巻第3号 (No.604)

2024 3



目次

前衛 (アヴァンギャルド) ということ 和知 剛 ... 33

特集：このごろ大学図書館に流行るもの。～ dtkML から拾う～

この特集の企画意図とその挫折 上村 順一 ... 34

大正大学の新たな図書館と未来への展望 林 恵理 ... 36

生成 AI 騒動と図書館 小野 亘 ... 40

琉球大学附属図書館におけるデジタル教科書・電子黒板の導入 上村 順一 ... 42

兵庫地域グループ1月例会「尼崎市立歴史博物館見学会」参加報告 六車彩都子 ... 45

前衛 (アヴァンギャルド) ということ

和知 剛

先月 (2月)、久しぶりに多賀城市立図書館を訪問した。前回訪ねたのは開館間もない2016年3月のことなので、ほぼ8年ぶりである。8年前に比べていろいろ変わったところもあり、変わってないところもあるわけだが、何よりも8年前に比べて図書館内の雰囲気は落ち着いていることが見て取れた。神田神保町にあるのかもしれない、こじられた書店の雰囲気は相変わらずなのだが、時季的なものなのか、老若男女のうち「老」を除いた若男女が多く、閲覧机を占拠して黙々と学習に励んでいて、以前に比べて「図書館らしく」なってきたではないか (何様目線だ) と正直思ってしまった。蔦屋書店の箇所やレストランのゾーンも含めて、何やら「場違い」な感じが薄れているのは、8年という歳月が多賀城市立図書館をそれなりに「図書館らしく」したのか、中の人の「図書館らしく」しようとする努力があってのものなのかまでは、さすがにわからないもの。

8年前には、明らかに「図書館らしからぬ」図書館を目指す、言うなれば「図書館の前衛 (アヴァンギャルド)」を目指していたと思いき多賀城市立図書館 (それは指定管理者受託企業の

意図でもあったはず) が、8年経って思ったより図書館側に寄せてきていたのが、わたしには意外なことでもあったのだが、考えてみれば「前衛」という立場をある期間維持していくということは、想像以上に労力のかかることなのだろう。先日、惜しくもこの世を去った小澤征爾が得意としていた演目の中に、ストラヴィンスキーの「春の祭典」があったが、この作品も1913年5月の初演時にはスキャンダルとも言うべき一大センセーションを巻き起こしたものの、小澤が1979年にフィリップス・レーベルに再録音したころには、すっかり演奏会の一般的なレパートリーとして定着していた。

多賀城市立図書館を「前衛」たらしめていた要素の幾つかは、他の図書館にも取り入れられ (図書館を「知識のアミューズメントパーク」として位置づけるやり方は、これも先日訪れた那須塩原市立図書館「みるる」がより徹底して表現している)、幾つかは多賀城において後退している (高書架のダミー本がリアルの本にぼちぼち侵食されている)。前衛とは言い条、スキャンダラスなセンセーションリズムは一過性のもので、図書館には地道な図書館としての役割が確かにあるのだろう。

(わち・つよし/郡山女子大学短期大学部)

特集：このごろ大学図書館に流行るもの。～dtkMLから拾う～

この特集の企画意図とその挫折

上村 順一

1. はじめに

本会報、特集企画の冒頭にその企画趣旨を記すのが慣例ですが、今回はその慣例を敢えて破って、今回の特集企画をどのように組み立てたか、そして、どうやって挫折してここに至ったか、ということ、順を追って告白していきます。

通常、こういうことはあからさまにしないものですが（何より恥ずかしいし完全に言い訳）、本会報がどうも敷居高めなように思われてならないことから（ホンマ?）、かなり正直なことを書いています。全く参考にならないとは思いますが、もし各位並びにグループで特集企画の立案ご担当のお役に立てるのであれば望外の喜びです。

2. コトの起こり

大学図書館研究会 ML、dtkML というものがあります。各位もご存じで、ほぼ全ての会員が入っているはずです。

dtkML は、本会報よりもくだけた、気軽な情報交換 tool です。最近 dtkML を通じて、会員各位への事務連絡等も行っておりますので、もし、大学図書館研究会員で、dtkML に入っていないという方々、事務局組織担当 soshiki@daitoken.com にご一報ください。登録の手続きをいたします。

さてその dtkML で、筆者は昨年（2023 年）12 月半ばに、以下のようなご照会をいたしました。

Subject: 大学生協等へのコインコピー機運用委託の状況（仕様書等）お伺い

今般、当館でコインコピー機の委託契約を結んでいる業者さんから、業務縮小のため、今年度限りで契約を打ち切りたいとの連絡がありました。

各位ご所属機関で、例えば大学生協あたりにコインコピー機の委託（用紙補充やトラブル対応など含む）をお願いしているところがそこそこあるのではないかと、思っています。

当館富士フィルムですが、もしかして富士フィルム自身（といっても子会社でしょうけど）がそういうの請け負っていたりする？

もし、仕様書や契約書等お送り可能であれば頂戴したく、ご多忙のところ恐れ入りますが、情報お願い申し上げます。

この問いに対し、実に多くの方々から、コメントを頂戴いたしました。dtkML を通じてのコメントの他、個人宛にもたくさん情報を頂戴いたしました。運用の仕様書実物を頂戴もいたしました。その節は大変お世話になりました。さすが大図研、といったところです。

また、この問いから派生した、関連する情報もいくつも出てきて、dtkML は若干の盛り上がりが見られたのは各位もご存じのことかと存じます。

3. 「これは特集企画たり得るのでは？」

この状況を見て、会報編集委員会も若干の盛り上がりを見せました。というのも、本号

は、会報編集委員会の担当で、しかも主担当は筆者でしたので、渡りに船とばかりに飛びついた訳です。まあこの考え方が安易だった訳ですが。

そこで、会報編集委員会で検討の結果、筆者から dtkML 宛、今年（2024 年）1 月半ば、以下のようなご照会をかけました。

Subject: 図書館のハードウェア導入に係る
会報 2024/03 号原稿募集

ちょっと前に、dtkML で、図書館のコピー機運用についての情報提供をお願いいたしました。その節は大変お世話になりました。ありがとうございます。実はその件、全く解決していないのですが、大学生協もなかなか大変なんだな、ということは分かってきました。

そうしましたところ、思いのほか？情報が出てきて、とてもうれしかったのです。ちょっと違う話題の導入にもなったようで、これはこれでありがたかったです。

せっかくなので、この手の、主にハードウェアの、昨今の導入事例をお持ちでしたらば、是非会報にてご発表願いたいなと思い、またぞろこの場に出てきた次第です。昨今でもなくてもいいかも、と思っています。

イマドキハードウェア？という向きもあるかもしれませんが、ソフトウェア（アプリケーション）の話題は、結構よくみますし話題にもなりますし、情報流通もそれなりにありますが、ハードウェアの導入事例というのは、あんまりみることがありません。ゼニがかかる、ということもあるかもしれません。

ので、さて特集企画として成立するかは分

からないのですが、その方面の原稿を募集したく思います。ハードウェアというか、装置的なもの、としてもいいかもと思っています。アプリケーションではないもの、とお考えくださってもいいかもしれません。

題して、「このごろ大学図書館に流行るもの。～最近の機材導入事例紹介～」。

会報に書くのはちょっとね、と思っていられっしゃる方が多いかもしれませんが、会報は言ってみればニュースレターなので、査読はないのは当然ですが、基本的に書いてくださった玉稿はそのまま会報に掲載します。記憶が散漫になる前に、会報で記録してみる、というのはいかがでしょうか。

4. 企画の方針転換

反応は上々でした！、と申し上げたいところですが、全くさっぱりでした。

実は筆者個人宛に、「大学図書館での障害者支援のためのいろいろなハードウェアが導入されているが、現況はどんなものだろうか」というご連絡を頂戴し、dtkML に共有の上、その方面の玉稿依頼先を検討していたのですが、筆者並びに会報編集委員の力不足（リサーチ不足といった方がより正しい）で、玉稿ご依頼まで至りませんでした。ご連絡くださった方、申し訳ございません。

また、「これはおもしろそうな特集企画ですな」というコメントも個人的に頂戴したりもしました。特集企画を貫徹できず、忸怩たる思いです。

さてここは方針転換、図書館の改修に関係する話題だったら、会員各位も興味あるところだろうし、書き手としても事例紹介ということで、書きやすいだろう、広い意味でハードウェアだし、と目論んでいたのですが、こちらも幾人の方々々に断られてしまいました。

誠に残念至極です。

唯一、大正大学図書館の事例をお引き受けくださった会員がいらして、交渉の結果、今回玉稿賜ることができました。大変興味深い記事です。ありがたいことです。

5. 更に方針転換（ということにしたい挫折）

このままではじり貧で、本号刊行も危ぶまれるところまで追い詰められ、筆者所属機関の事例を出すことにいたしました。イマドキの図書館では、ラーニング・コモンズ導入とともに、電子黒板の導入なぞアタリマエ、イマドキなんなんだ、と思われる向きもあろうかと存じます。ご容赦願います。

と、そうこうしているうちに、実に興味深い投稿がdtkMLに投ぜられました。そう、「生成AI」に係る話題です。こちら会員各位から、なかなかのレスポンスがあり、せっかくなので、考えるきっかけを与えてくださった、東京地域グループの小野さまに、関連する記事をお願いし、ご了承を得られました。

6. 懺悔とお詫び

特集企画の本体を残し、タイトル関連情報を後付けの理由で変更してみました。特集というもおこがましい状況ですが、ご容赦願えればと存じます。

なお、本会報は学術雑誌ではなく、単なる大学図書館研究会のニュースレターだと思っていますので、たまにはこういうことを書いてもいいかな、と考えています。少なくとも学術雑誌のような査読はありませんし（本会誌は原著論文を出すところではありません。そういうのは会誌で承ります。会誌への玉稿も承っております。）、しかも読者は確実に大学図書館員とその関係者です。こんな便利な媒体はないと思うんですがねえ……。

そもそも、前号から、筆者出過ぎな感じですよ。前号も今号も、何故か同一号に2つも記事を出しています。お目汚し、大変恐縮です。

最後に、一番最初のきっかけになった、本学の複写運用委託ですが、残念ながら大学生協でお引受けできない、という正式な回答を頂戴してしまいました。大学生協も新型コロナを経て、なかなか大変なようです。で、さて来年度からコピー機運用どうしよう、という、とっても困った状況に本学ありますことをご報告して、この駄文を結びます。

（うえむら・じゅんいち／本号担当会報
編集委員・琉球大学附属図書館）

大正大学の新たな図書館と未来への展望

林 恵理

1. はじめに

2020年8月。コロナ禍で学生の入構制限が続いているなか、大正大学では新図書館（以下、8号館）オープンに伴うテープカットを実施しました（画像1）。

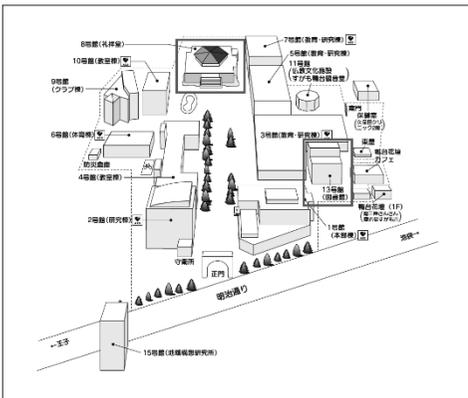
地上1階～4階建ての総合学修支援施設として、2020年8月末に仮オープン、11月にグランドオープンしました。新型コロナウイルスがまん延し、社会的な閉塞感が漂う中、8号館竣工をきっかけに、どんどん挑戦していこう！と意気込んだことを思い出します。ここでは、本学の新しい図書館の改修と現在、今後の展望について述べたいと思います。



画像1：テープカットの様子

2. 改修の背景

本学は東京都豊島区に位置する総合大学です。これまでの図書館は別の建物（以下、13号館）の地下2階～地上3階にありました。



画像2：2017年3月時点の校舎案内図

時代のニーズに合わせて学部・学科を新設した結果、教室のさらなる確保が求められ、建物の改修が続きました。その結果、ここ10年ほどでキャンパス内の様子も大きく変わり、13号館が他の教室棟の裏に位置する形に変わってしまいました（画像2）。毎年春になると、行き方がわからない新入生向けに、「図書館はこちら」という案内看板を立てるほどで、本学としても喫緊の課題でした。今回、図書館を建設する場所として、礼拝堂（以下、旧8号館）を取り壊し、そこに新たに建

設することが決定しました。旧8号館は、入学式や学位授与式、講演や仏教行事などを執り行う講堂で、当時、最大収容数を誇る大きな建物でした（画像3）。そのため、OB・OGの中には大正大学＝礼拝堂、旧8号館というイメージを持つ人も少なくありません。職員であり、卒業生である私も「大学のシンボルを取り壊す」と知ったときは、やはり寂しさを覚えました。大学の新しい象徴を作ると決めた当局の意向は、非常に印象深かったです。そんな様々な思い出の詰まった旧8号館について、着工から新棟完成までを本学職員（有志）が定点撮影しました。写真をつないで作成したタイムラプス動画は、学内でも大きな話題になりました。よろしければ、ぜひご覧ください。

<https://youtu.be/YScwT0DQqjo?si=yMKtM0zHgXmj78rC>



画像3：当時の礼拝堂（旧8号館）

3. 各フロアについて

8号館は、ラーニングcommons、図書館、礼拝ホールからなる複合施設です。その特徴は、フロアごとに役割を持たせている点です（画像4）。1階はラーニングcommonsとカフェを併設し「本の街」と名付けました。学生、教職員、地域住民が集い、学び合う場所を目指しています。テーブルや椅子を多数配置し、思い思いに過ごすことができます。壁には大型書架（ブックウォール）を設置、棚上部は本学教員から寄贈図書を募り、ディスプレイとして並べています。図書館エリア外

にあたるこの場所には、絵本や図鑑などの大型本を配架、新聞も20数紙置いています。あえて図書館エリアではなく、多くの人が集う1階に並べることで、社会とつながる空間を生み出しています。



画像4：フロアごとに役割を階層化

大きく湾曲した階段で2階のゲートを通ると、ここから図書館エリアに入ります。ラーニングcommonsを見下ろすように「本の路(みち)」が続くこのフロアは、本屋大賞や諸資格関係などの別置図書を配架するほか、大型書籍や新聞縮刷版を置いています。大きな窓から光が射し込む閲覧席は、利用者からも人気です。

3階は、机と椅子やソファをゆったりと配置しているオープンスペースが特徴で、「本の閃(ひらめき)」と名付けています。フロアに上がったときの圧迫感を防ぐために、あえて本を並べすぎないように工夫しています。この空間は図書館ガイダンスや、各種イベント会場として、私たち図書館職員も積極的に利用しています。

開放感のある「本の小径(こみち)」を進んでいくと(画像5)、4階「本の森」へと続きます。3階までとは大きく異なり、フロア全体を「静寂エリア」と定め、会話や音を出さないようルールを課しています。卒業論文などに取り組む学生や大学院生の利用を想定し、個室も20部屋設置しています。研究や読書に没入して欲しいという願いを込めた

空間です。



画像5：本の小径から見える景色

4. 私たちの考える図書館像

8号館の開館にあたって、本学では、以下のとおり「めざす図書館像」を策定しました。

- ①学生相互に、あるいは様々な人々が交流し、学び合うことを通して、新たな文化を創造するとともに、一人ひとりの物語を生み人生を輝きのあるものにする総合学修支援施設
- ②多様性を尊重する社会の実現に向けて、お互いに学び合い、さまざまな価値観を共有・共感し、豊かな知性・感性を育むことのできる総合学修支援施設
- ③新たな共生社会の実現に向けて、地域社会の交流拠点となり豊かな学び合いを通して、お互いの思いや願いを共有できる総合学修支援施設

これら「めざす図書館像」を軸として、職員は毎年、事業計画や予算案を策定し、法人や事務局長らに対して説明しています。図書館は知の集積地であり、それらは欠かせない基本的な役割、機能であることは言うまでもありません。加えて、カリキュラムと連携し、学修支援の役割・機能を特に重視しています。また、資料が揃っているだけではなく、どのように資料を活用するかも重要である、とい

う考えの基、日々の業務に励んでいます。また、当館は「本を読むところ」「勉強するところ」に加え「第3の居場所（サードプレイス）」としての機能を持たせています。そこには、「特に用事がなくても図書館に来てほしい」という私たちの思いがあります。

5. 新図書館での取組

開館からの3年間、図書館長を筆頭に、私たちは様々な取組を進めて参りました。冒頭にも申し上げましたが、開館当初は折しもコロナ禍で、オンライン授業の日々が続きました。長期にわたり、図書館を閉館せざるを得ない事態で、我々も非常に心苦しい時期でした。このような状況下、学生のコミュニケーション不足を懸念し、図書館と学修支援の部署による「学びのコミュニティ」という独自の課外講座を立案、現在も継続して実施しています。また、豊島区立図書館と共催で「にぎやかな図書館祭(フェス)」を開催しました。このイベントは、「図書館を外に開いていこう」と取り組まれている豊島区立図書館と、「多くの人が集い、学び合う場所。サードプレイスとしての図書館」を目指している我々の思いが合致し、地域社会に開かれたイベントを開催しよう、と実施の運びとなりました。具体的な取組内容については、書籍『「学び」と「集い」の図書館に挑む』にも記述しておりますので、ぜひご覧いただければ幸いです。



画像6：にぎやかな図書館祭ポスター

6. 今後の展望

当館はもともと、近隣住民の利用が多く、コロナ禍で入構制限している間も「新しい図書館は、いつから利用できるか」と問い合わせを多数受けていました。2023年5月、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行されたことを受け、8号館もようやく一般の方に利用いただけるようになりました。現在は、大学周辺に位置する中学校・高等学校の生徒にも、学びの場として活用いただいています。今後も学生をはじめとする本学関係者の利用を最優先にしながら、さらに多くの方に来館いただけるよう努めたいと思っています。

東京大学の斎藤幸平氏は、自身の著書の中で、社会的に人々に共有され、管理されるべき富のことを「コモン」と紹介しています。図書館に当てはめて考えてみますと、所蔵されている資料は「コモン」となり得るのではないのでしょうか。各館が持っている知的財産、情報資源を専有するのではなく、共有・共用し、学び合うことが、これからの社会において非常に重要と考えます。本学の建学の理念である「智慧と慈悲の実践」を体現するためにも、地域社会に開けた居場所づくりを目指したいと思います。

現在、デジタル・アーカイブについても長期的な計画が進めています。会報「大学の図書館」2024年5月号にも、本学の事例を掲載させていただく予定です。そちらもお読みいただけますと幸いです。

7. さいごに

これまでの大学図書館は、利用者側がアクションを起こさなければ使われない、という形が主流だったかもしれません。しかしこれからは、より積極的に情報発信していくことが重要と考えます。一人ひとりの利用方法を尊重しながら、皆が快適に過ごせる空間を提供したいと考えています。

(はやし・えり／大正大学附属図書館)

8. 参考文献・ホームページ

大正大学附属図書館, 『「学び」と「集い」の図書館に挑む—大学図書館の未来と創造』, 大正大学出版会, 2023.
斎藤幸平, 『人新世の「資本論」』, 集英社新書, 2020.

「学び」と「集い」の図書館に挑む 大学図書館の未来と創造 | 図書館総合展

<https://www.libraryfair.jp/booksession/2023/67> (参照: 2024年2月8日)

【動画】書籍紹介『「学び」と「集い」の図書館に挑む』大正大学附属図書館
https://youtu.be/78nWCp2_gr4 (参照: 2024年2月8日)

大正大学 8号館 総合学修支援施設「iF DESIGN AWARD」最高受賞賞

https://www.tais.ac.jp/p/tu_build8/ (参照: 2024年2月16日)

礼拝堂(旧8号館) Photo Gallery
https://youtu.be/4bqDiOTutls?si=p_xz4_355aet5T0u (参照: 2024年2月16日)

2020年9月「総合学修支援施設」オープン!

【大正大学】

<https://www.tais.ac.jp/p/dac-institution/>
(参照: 2024年2月16日)

【動画】大正大学新8号館 建築の軌跡

<https://youtu.be/YScwT0DQqjo?si=yMKtM0zHgXmj78rC> (参照: 2024年2月16日)

斎藤幸平 「「コモン」とは何か」NHK 解説委員室

<https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/488933.html> (参照: 2024年2月28日)

生成 AI 騒動と図書館

小野 亘

1. はじめに

本稿は、メーリングリスト dtk への私の投稿(“生成 AI 騒動で思うこと”)を契機に、個人的な雑感をまとめたものです。MLの投稿との重複はご容赦ください。また、生成 AI に関する説明や、業務に活用する方策などには触れませんでした¹⁾。

さて、現在、生成 AI 騒動の真っ只中ですが、いわゆる検索エンジンができて30年、Google が図書館を脅かすのではないかという議論があった頃から20年以上経ち、その頃と似ているところがあるなあと思っています。ネットに情報は溢れていますが、いまだに(というか本質的に)玉石混交で、また、特に人社系の情報の中には検索エンジンなどネットでは入手はおろか、探すことすらできないものもあります。当然、電子的な、特にオープンなデータに依存している生成 AI(大規模言語モデル)は、そのまま同じ課題を引きずっています。

最近のネット上の議論で、生成 AI では、①レポートも、ましてや学術論文は書けないので、リアルな大学図書館が必要であり、②生成 AI を使うにしてもリテラシーが大事です、③だから、図書館も図書館員の仕事もな

くなりません、という雰囲気を感じ、ちょっと危うい議論かなと思っています（特に文献上の根拠などはないので、単に私の妄想かもしれません）。

2. 生成AIと論文、レポート

私は、生成AIはあくまでWORDやGoogleと同じツールなので、論文執筆に使ってはいけないというよりは、使った結果については著者が責任をとりなさい、ということだと考えています。AIの助けを借りた論文やレポートによい評価がつくにせよ、AIが生成した間違った事実やおかしな表現をそのまま出し悪い評価となっても、責任をとるのは著者です。たしかに、査読者や教員の方々や、評価の仕組みも、AIを使った論文やレポートに慣れていないため、見抜きにくいなど、過渡期特有の対策は必要です。

ただ、20年以上前、Googleが登場した時やCiNii（当時はNACSIS Webcat）が登場した時も、そんなものに頼ってはいけません。ならない、といった、今では笑い話のようなことがまじめに論じられていましたが、生成AIも今はそういう時期なんだろうと思います。

3. 生成AIとリテラシー

現状の生成AIには、幻覚や、最新の情報、特定領域の情報に対応していない、などの問題を抱えており、生成された情報を使うには情報リテラシー、メディアリテラシーが重要です、は本当にそうだと思います。

しかし、そのような問題は、生成AI以前に、ネットが登場して以来の問題です。図書館（員）の戦略としてそこに注力していく、というのもそのとおりなところは認めつつも、ネット定着以降、大学図書館は、電子ジャーナルは購買者としての立場にとどまり、電子図書館や、機関リポジトリでは、ある側面で成果はあるものの、検索すらできないものも

まだまだ多く、あるいはサイロ化の問題を抱えている、といった状況は、“Googleの登場以降、利用者は図書館のディスカバリーサービスやデータベースよりもGoogle Scholarによって文献を探す状況となったことや、ソーシャルメディアが誤った情報を流通させることを図書館界が深刻に受け止めなかったと指摘している。その上でChatGPTが変革をもたらすものならば、これらの「過去の教訓」から学べることがあると述べている。”²⁾と示唆されているとおもいます。

もちろん、ある程度の下調べの上でやっぱり現物を見るとか、教科書的なものは紙で通読した方がよい、というのはもちろんですが、基本的な文献ですら電子的に読めないものがある、ましてや電子的に検索すらできないものがまだあるからリアルな図書館重要、というのは、大学図書館員としては（現在、私は図書館現場にはおりませんが）、忸怩たるものを感じています。

4. まとめにかえて

“data is fuel for AI”と言われ、図書館は、コンテンツやデータの供給や共有、アーカイブに責任を持っているドメインです。

従って、大学図書館は、生成AIに課題がある、と評論するだけではなく、それに主体的に関わる責任があると考えます。図書館が持つ、あるいは関与するコンテンツやデータを使って、生成AIの能力を引き出し、改善に関与するとか、それによって学術情報を円滑に流通するために働きます、とか、大学図書館（員）としても、コンテンツのデジタル化や、研究データに関する支援を通して「デジタル・ライブラリー」³⁾の実現により、生成AIの改善・解決に向けて貢献していきます、といった前向きなメッセージを利用者に向けて発信することはできないでしょうか。

生成AIとその周辺の技術の進歩は早く、いま問題とされていることの多くは、早晚解

決するか、さらに次の技術が出てくるでしょうし、ウェブや検索エンジン、電子ジャーナルがそうだったように、完璧にはほど遠かったとしても、ある閾値（キャズム）を超えれば、普通のユーザーは雪崩を打ってあちら側に行ってしまう。生成 AI を使って、論文や図書、データを自在に引き出しながら、対話的に論文を作成する、というような景色はすぐそこまで来ています。その時、生成 AI に見えないコンテンツは「ないもの」として扱われます。現にすでに一部の領域では、電子で入手できないものは「ないもの」として扱われているようです。

原物の重要性や、リアルな対面の場の重要性は決してなくなりませんが、それらを、今までどおり大学図書館で維持しなければならないのか、あるいは他の部署や機関、ドメインとの論理的、物理的な機能分化をした方が合理的なのか、を問うているのが、昨今の「ライブラリー・スキーマ」という議論だろう、と私は理解しています。図書館（員）がこれからも残っていくとすれば、生成 AI では見つけられない情報が図書館には埋もれているから、だけではないはずです。

注・引用文献

- 1) “正確性よりも創造性を求められる（正解がない）業務で、生成 AI を利用することが吉”（高橋菜奈子, 図書館業務の四象限と生成 AI (Code4lib2023_LT_library&AI)., <https://www.slideshare.net/tnanako64/code4lib2023ltlibraryai>. (参照 23 Feb. 2024.) が参考になる。
- 2) 青野正太.”E2626 – 生成 AI が図書館の情報サービスに与える影響<文献紹介>.”, カレントアウェアネス・ポータル, 7 Sept. 2023, current.ndl.go.jp/e2626. (参照 23 Feb. 2024.)
- 3) 「2030 デジタル・ライブラリー」推進に関する検討会：文部科学省., https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shinkou/

071/index.html. (参照 23 Feb. 2024.)

(おの・わたる／人間文化研究機構)

琉球大学附属図書館における デジタル教科書・電子黒板の導入

上村 順一

1. はじめに

琉球大学附属図書館では、学内の競争的資金を用い、学内関係学部のご協力の下、デジタル教科書と電子黒板を導入しましたのでご紹介します。

2. 琉球大学の概要

琉球大学は、昭和 25 (1950) 年 5 月、琉球列島米国民政府の管理下で首里城址に開学、その後琉球政府立を経て、昭和 47 (1972) 年 5 月、沖縄の本土復帰に伴い国立大学に移管され、現在に至っています。

現在、人文社会・国際地域創造・教育・理・医・工・農の 7 学部 14 学科 1 課程、また人文社会科学・地域共創・教育学・医学・保健学・理工学・農学・法務の 9 研究科 4 プログラムから構成されています。

校地は、千原キャンパスと上原キャンパスに分かれ、上原キャンパスには医学系の、千原キャンパスにはそれ以外の学部・研究科が立地しています。

学生数は学部生・大学院生合わせて 7,900 名弱、教職員数は約 2,300 名です。

2.1 琉球大学附属図書館の概要

附属図書館は、開学時に同時に開館しました。そして、昭和 56 (1981) 年に千原キャンパスに移転、現在に至ります。ちなみに前項で、琉球大学は首里城址に存在したと記しましたが、つまりは現在、守礼門や再建中の正殿のある、首里城公園にあったのです。ち

なみに、首里城公園内に琉球大学跡の石碑もあります。

また、医学系は、昭和43(1968)年5月に保健学部設置に伴い、当時の与儀キャンパスに図書室を開設、昭和54(1979)年10月の医学部設置を経て、昭和59(1984)年に、上原キャンパスに図書館を移転・設置し、現在に至ります。なお、与儀キャンパスは、現在の沖縄県立看護大学が設置されている場所にありました。

現在、前者を本館、後者を分館とした、2図書館により構成されています。

本館は、平成6(1994)年に増築、平成10(1998)年に本館積層書庫を増築、また、平成28(2016)年に改修工事を行いました。

本館の総面積は9,950m²、収容可能冊数は103万冊、閲覧座席数は830席です。また分館の総面積は1,403m²、収容可能冊数は14万冊、閲覧座席数は182席です。

本館分館合わせ、また和洋合わせ、現在約97万冊の蔵書があります。入館者数は、約169,000名です。

上原キャンパスは、令和7(2025)年1月から4月に西普天間地区に移転を予定しており、分館も同時に移転開館することになっています。

なお、本項の数値は、令和4(2022)年度末現在です。

3. デジタル教科書・電子黒板の導入経緯

文部科学省初等中等教育局教科書課から、令和6(2024)年度より、全ての小中学校等を対象に、小学校5年生から中学校3年生の「英語」の授業で、デジタル教科書が先行導入されることになった、という通知がありました。このことは、本学学生が、教育実習等でデジタル教科書に触れる機会が発生する、ということでもあります。つまり、教育実習前にデジタル教科書に触れておく必要性があ

るだろう、という意味にも取れます。

これを承け、本学で英語科の教員免許を取得できる、国際地域創造学部・教育学部と連携し、学内の競争的資金である「戦略的地域連携推進経費教育等プロジェクト推進経費」に共同して申請を行い、デジタル教科書の現物を学内で導入し、導入先としては、学内のどの学生もアクセスしやすい、附属図書館に設置されるべきだ、という結論に達しました。

学内での審査の結果、無事、デジタル教科書と、それを投影する電子黒板の導入が認められました。

デジタル教科書を刊行している出版者は、デジタル教科書を図書館に販売するのを躊躇しているところもあり結果的に、東京書籍株式会社・教育出版株式会社・光村図書出版株式会社の、中学英語3学年分のデジタル教科書を、また電子黒板は75インチのものを2台、導入することとしました。そして、導入の都合で、先に電子黒板が、その後デジタル教科書が当館にやって参りました。

4. 電子黒板の運用

必要な調達手続きを経て、電子黒板2台が図書館にやってきたのは、令和5(2023)年10月末でした。さっそく、本学附属図書館のサービス部門で利用法に対する検討が行われ、同年12月1日から、「テスト運用」として実際に利用者に提供を開始し、約1ヶ月半の実績に基づき、運用を見直した上で、令和6(2024)年1月22日から、「正式運用」を開始しました。

運用の方法は、電源コードを抜いた状態で電子黒板本体をラーニング・コモンズに置いておき、利用希望者は学生証・職員証をカウンターに持参の上、利用者用マニュアルと電源コードを利用者に引き渡して利用に供しています。

5. デジタル教科書の運用

続けて、デジタル教科書が図書館にやってきたのは、令和5(2023)年12月でした。デジタル教科書は、教科書刊行会社との取り決めで、教員免許取得を目指す学生や教職課程に関わる教員に利用が限定されることになりました。

先行していた電子黒板の運用を参考にしつつ、こちらも運用方法を検討することになり、令和6(2024)年1月10日から、「正式運用」として運用を開始しました。

実際のデジタル教科書は、PCにインストールした状態で利用に供することになり、利用希望者は学生証・職員証をカウンターに持参の上、学生証・職員証で利用可能者であるかを判定の上、利用者用マニュアルとPCを利用者に引き渡して利用に供しています。なお、デジタル教科書を利用するために電子黒板を購入した経緯もあり、もし、デジタル教科書利用希望者が出てきた場合、電子黒板は、デジタル教科書利用者を優先して取り扱うことにもしました。

6. 運用開始後の状況

「テスト運用」「正式運用」の開始の両方、附属図書館のお知らせで広報したほか、全学関係部署にも学内通知を行い、利用開始をPRしました。

さて、デジタル教科書は利用者が限定されていますので、利用者数の伸びは難しいかなと思っていたのですが、電子黒板も、まだ目新しいことからか、やや利用率が伸び悩み、新たな利用に係る広報が必須な状態でした。

そのような状態で、予算獲得時の計画にも盛り込んでいた電子黒板説明会を、令和6(2024)年1月に1回、デジタル教科書体験説明会を同年2月に3回、開催しました。

電子黒板説明会では導入元販社の、またデジタル教科書体験説明会では、東京書籍からインストラクターをお招きし、詳細な使い方

や授業での活用方法など、実際に電子黒板でデジタル教科書を動かしながらの説明がありました。デジタル教科書体験説明会は、デモンストレーションが効果的だったのか、教員からの質疑応答が多岐に渡ってありました。

効果はそれなりにあり、早速、ラーニング・コモンズでの、デジタル教科書・電子黒板の利用予約が入り、一安心といったところです。が、せっかく導入された最新機材、もっと利用普及に尽力する必要があるようです。

7. おわりに

ごく簡単に、琉球大学附属図書館でのデジタル教科書・電子黒板の導入について触れました。どちらも、先行して導入している図書館は数多くあり、何を今更、という感じの本記事ですが、各位のご参考になれば幸甚に存じます。

デジタル教科書を先行して導入している図書館、あるいはこれから導入しようとしている図書館と連携し、前述の3社以外に対し、図書館で利用できるようにしてほしい、という声が出せれば、実習に行く学生が困ることもなくなるかな、というのが率直な印象です。

最後に、本学附属図書館関係各位の情報提供に謝意を申し上げます。

参考文献

- 1) 「琉大のデータ」
<https://www.u-ryukyu.ac.jp/aboutus/data/>
- 2) 「学習者用デジタル教科書について」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoukasho/seido/1407731.htm

(うえむら・じゅんいち)

琉球大学附属図書館)

兵庫地域グループ1月例会 「尼崎市立歴史博物館見学会」 参加報告

六車 彩都子

2024年1月28日、兵庫地域グループ1月例会「尼崎市立歴史博物館見学会」が開催された。辻川敦氏（尼崎市立歴史博物館あまがさきアーカイブズ再任用職員・認証アーキビスト）により、アーカイブズを含んだ博物館全体をご案内いただくかたちで行われ、参加対象者は大学図書館研究会員非会員問わず募集し、当日の参加者数は9名であった。

尼崎市立歴史博物館は、「文化財系博物館」と「地域研究史料室「あまがさきアーカイブズ」」の二つのセクションで構成されている。このうち、あまがさきアーカイブズは尼崎市の公文書館の機能を持っており、同地域の様々な史料を収集、保存、閲覧に供している。当日は、地域研究史料室、史料閲覧室、書庫で構成され、順にご案内いただいた。まず、地域研究史料室では、利用者がすぐに職員に問い合わせができるよう、事務エリアと閲覧席をカウンターで仕切っている状態になっている。ここに配架されている史料は自由に閲覧できる。また、史料の種類（学校史、社史、参考図書等）によってゾーニングされている。

史料閲覧室は、地元の研究会など、グループでの学習を行うときに使用される。こちらにも図書があるほか、マイクロフィルムが保管されている。また、資料保存のための作業も、同室でアーカイブズのスタッフが行うほか、現在、京都大学人文科学研究所（以下、人文研）が雇用するスタッフによる作業も行われている。これは、あまがさきアーカイブズが、人文研と連携協定を結んでいるからである。協力関係が生まれた経緯は次の通り。まず、人文研の所長がアーカイブズの専門委員をつとめていたというご縁があったこと。

それに加え、人文研の掲げる「調査・活用されていない近現代史料の調査の道を開く」というミッションに基づくアウトリーチ事業の拠点として、近現代史料を多く持つ歴史博物館が適していると認められたこと。ご説明いただいたのはこの二点だった。

書庫は三種類。①一般図書を収蔵している部屋、②写真類を収蔵している部屋、③貴重史料室が設けられている。写真類を収蔵している部屋には、アルバム等、写真が貼り付けられた史料のほか、フィルムの現物を、中性紙リフィルに入れたうえで更に中性紙封筒に入れて保管している。貴重史料室には、古文書のほか、公害訴訟関連の史料等が保管されており、そのほとんどが中性紙箱に入れられていた。密閉度が高いのと、壁床には調湿機能がある材質が使用されているため、外気の温湿度変化に左右されない。空気の循環と、定期的にカビが生えていないかの確認は行っているとのこと。貴重史料はラベルを貼り付ける方針であり、中性紙ラベルにインクジェット印刷で記述されている。

博物館では、原始・古代から近・現代まで、年代によって6つの部屋に分かれた常設展示エリアを、各時代における尼崎市の解説とともにご案内いただいた。『現代』の部屋では、尼崎市の行政が公害に対してどのように対応してきたかが重点的に展示されていた。

その後、辻川氏より改めてあまがさきアーカイブズの概要についての説明があり、続いて質疑応答が行われた。アーカイブズの存在感を上げる＝相談利用人数を増やす方法として、特別に何か企画展示等を行うのではなく、一番の本業であるレファレンス業務を強化、「件数以外に詳細な記録を付けて組織内で共有し、さらにもその一部を国立国会図書館レファレンス協同データベースにおいて公開することによって相談事例を外部からも知れる状態にし、アーカイブズ利用への敷居が低くなることを目指した」という旨の話が印象に残

大学の図書館 第43巻第3号 (No.604) 2024年3月25日 (毎月25日発行) ISSN : 0286-6854
編集・発行 : 大学図書館研究会 年間予約購読料 : 送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒305-0033 茨城県つくば市東新井10-1-111 マザータンク気付

E-mail : shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> 三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座 : 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒105-0013 東京都港区浜松町2-2-15 浜松町ダイヤビル2F

E-mail : dtk_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座 : 00190-2-79769 大学図書館研究会

った。この『記録を付けること』は内部的にもよい影響があり、レファレンス事例を共有することが、職員のスキルアップに繋がっている。

図書館との連携は比較的密に行われている印象。図書館側に「歴史の専門施設である」と認識されているため、図書館側からレファレンスの照会、引継ぎが行われている。また、図書展示への協力も行っている。

認証アーキビストの資格を持つ正規職員を複数人雇用出来ている点や、人文研のアウトリーチ拠点として選ばれている点など、同アーカイブズならびに歴史博物館は、自治体の内外から高い評価と大きな期待を受けていることが窺えた。

(むぐるま・さとこ/大阪大学)

議事要録

2023/2024年度 第5回常任委員会

日時 : 2024年2月25日 (日) -2024年3月3日 (日)

場所 : メール審議 (フォーム回答)

出席者 (敬称略) :

呑海, 赤澤, 上村, 有馬, 北川 (以上, 常任委員), 青山, 磯本, 澤木, 渡邊 (以上, 常任 (特定) 委員)

◆議事の詳細は以下からご覧ください。

<https://www.daitoken.com/committee/>